

地域との連携によるフィールドワーク教育プログラムの成果と課題

佐野淳也・吉田敦也・山中英生・豊田哲也・澤田俊明
(徳島大学地域創生センター)

1. 事業の背景

教育と研究と並んで社会貢献は大学が果たすべき第三の使命といわれる。徳島大学地域創生センターの設立目的は、大学が有する学術的なりソースを活用して地域社会の課題を解決し活性化に貢献することにある。地域 ICT 化、商工農林水産業等の活性化など、地域社会において目に見える変化を起し、魅力・活力にあふれる徳島づくりを目指し活動をおこなっている。しかし、社会貢献は大学が一方的に働きかけるだけではない。地域創生センターでは「地域と大学がともに学びあう関係」を構築し、地域社会の活性化と大学教育の質向上を同時に実現していくことを目標の一つとしている。

言うまでもなく、大学と地域の実りある協働には、相互の信頼関係の構築と中長期的な活動の積み重ねが求められる。地域づくりの先進地として知られる徳島県上勝町と徳島大学の間では、地域リーダーと大学研究者との個人的なつながりが長く先行したが、組織的なパートナーシップを確立するために包括協定が結ばれた。この枠組みを実効あるものにするべく、中山間地域におけるビジネス創出のための人材養成拠点として平成 21 年度に「上勝学舎」が設置され、地域創生センターがその主な運営を担っている。これまで、中山間地域における持続可能な発展や自然共生型社会の構築を目指し、人材育成や研究支援を展開してきた。

平成 25 年 9 月に徳島大学総合科学部が中心となって「インターユニ・フィールドワーク・プログラム (IFP2013)」が上勝町で実施された。これは地域学系大学・学部等連絡協議会に参加する鳥取大学地域学部や岐阜大学地域科学部と協力し、4泊5日の合宿研修を企画し、実践的な地域調査

実習を通じて地域課題を把握し解決に向けた提案をおこなうことを狙いとするものである。IFP2013 は「課題の解決と新たな価値創造」をテーマとする上勝学舎の取り組みとしても位置づけられ、地域創生センターが主に上勝町内の様々なステークホルダーの連絡調整等の業務を担った。

本報告では IFP2013 を事例に、徳島大学の社会貢献や地域連携の視点から見た成果と課題について検証を行う(プログラムの目的と経緯については、別報告「大学間連携によるフィールドワーク教育プログラムの開発と実施」を参照)。

2. 事業の内容

IFP2013 では、平成 25 年 9 月 11 日(水)～15 日(日)の4泊5日で徳島大学・鳥取大学・岐阜大学より教員 12 名、学生名が上勝町内に滞在した。上勝町長や町内の若手起業家などから町内の各イシューに即したプレゼンを聞き、その後学生が各々興味のあるテーマに分かれて自らフィールドワークを行った。

そして4日目には、成果&課題の把握および改善提案までを行う成果発表会を実施し、多くの町民の参加を得た。

上勝町内よりご登壇いただいた講師のみなさんの氏名、肩書、演題は以下の通りである。

《1日目》(9月11日)

- ①花本 靖(上勝町長)「上勝町のまちづくり」
- ②飯山 直樹(NPO 法人かみかつ里山倶楽部/県立千年の森ふれあい館)「上勝の森づくり」
- ③松下 和照(檜原の棚田村 代表)「棚田保全による地域の再生」
- ④大西 正泰(一般社団法人ソシオデザイン 代表/シェアカフェ オーナー)「農村起業で地域を元気に」

《2日目》(9月12日)

- ①粟飯原 啓吾(株式会社いもどり)「いろいろ事業とインターンシップ」
- ②藤井 園苗(NPO法人 ゼロ・ウェイストアカデミー 事務局長)「ゼロウェイスト運動の展開」
- ③小林 篤司(一般社団法人 地職住推進機構 代表理事)「持続可能で住みよい地域づくり」
- ④東 輝実(合同会社 RDND)「新しい農村起業」

3. 事業の成果

1) 学生への教育成果

こうしたプログラムを通じた参加学生に対する教育成果として、以下のものが挙げられる。

- ① 実際の地域社会を対象にした能動的な学習体験及び地域再生の先進事例から、多くの知見や課題を学ぶことができた。
- ② 地域をフィールドワークし調査する方法を学ぶことができた。
- ③ 大学を越えた交流を通じ相互に刺激を与えあうことができた。またチームワークで仕事をし、新しい友人をつくるコミュニケーション力を高めることができた。
- ④ 成果報告会での発表を通じて、地域の課題解決への提案力やプレゼンスキルを学ぶことができた。
- ⑤ 地域の方とのふれあいを通して、自分の生き方と社会との関わりを考えることができた。

2) 教員・大学への教育改善の成果

また、本プログラムによる教員の教育改善成果としては、教員の相互研修によって教育能力を向上させる良い機会となったことが挙げられる。また学生への指導を通して、地域と連携しつつ教育研究成果を社会に還元する場作りを行うという成果が挙げられた。

3) 地域貢献事業としての成果

取材を受ける地域社会の側としては、棚田など生活や集落の場で元気な学生を迎え交流する中で、精神面での活性化の効果があったと思われる。

また、成果発表会に参加した町民の感想では、

単に学んだことの発表ではなく、各々学生の専門性に基づいた考察・分析、さらに今後の地域づくりへの提案も含まれた内容になっていたことから、大いに参考になったとの声も聞かれた。

さらに、今回のフィールドワーク部分の現地サポートスタッフとして参加いただいた地域おこし協力隊のメンバーからは、学生の意欲や好奇心などに触れることを通しておおいに刺激を受け、サポートを通して多く学ぶことができたとのフィードバックが得られた。

4. 事業の課題

全体としては大きな成果を上げることができたプログラムだったが、初めての試みだっただけにいくつかの課題も残された。

ひとつは、受け入れ側の上勝町の住民や組織・団体等に対する負担の大きさや戸惑いのあった点だ。今回のフィールドワークは、事前に事務局や教員サイドで訪問先を準備しておく「作り置き」ではなく、上勝町の地域再生に関わる7つのテーマを学生が自由に選択し、かつそのテーマに沿って自らフィールドワーク計画をつくり、訪問先にその場でアポを取る、というスタイルを取った。

これは学生の自主性を重んじ、自ら課題設定して地域社会との折衝能力を高める上で非常に有効なスタイルであったが、他方住民や町内の関連機関サイドからは、突然のアポや取材に戸惑いの声が聞かれたり、また特定の団体に複数の学生のグループから取材が重なったりと、先方にご迷惑をおかけした部分もあった。このあたり、主催者側でうまくコーディネーションをしたり、事前に学生から取材が来る可能性がある旨を伝えるなどの丁寧な準備が今後は必要だったと言える。

またフィールド調査時の町内の移動手段の確保も今後の課題である。今回は、宿泊先の温泉宿に運転者付きの車両を出していただいたり、サポーターとして来ていただいた地域おこし協力隊のみなさんの自家用車を出していただいたりすることで対応した。次回はよりスムーズな準備が必要かと思われる。